

もし、カブトムシだったら

子どもを「観る」とは、ただ漠然と子どもを見るのではなく、観点をもって観る、寄り添って保育のための手がかりを見取るなど、保育者側の姿勢が重要です。本実践の園は、「子どもたちの中には自分の興味・関心に基づいて、なんで？ どうして？ もっと知りたいと探究したい気持ち＝本能的な活動意欲がある」との考えをもって観ることで、子どもの課題を捉え、創意工夫のある実践をしています。

社会福祉法人さがみ愛育会 幼保連携型認定こども園 愛の園ふちのべこども園 5歳児

【実態を観る】 3歳児から担任のために信頼関係ができ、落ち着いて5歳児としての生活をしていると感じていた保育者間で、進級して1ヶ月が過ぎた頃、印象的なエピソードを出し合い理解を深めた。その中で特に気になった3つのエピソードから、子どもたちの主体的で自由な発想や行動（ヒト・モノ・コトとの対話）が妨げられていることに気づいた。

エピソード1 おやつ配膳（コト・ヒトとの対話）

おやつ配膳は、子どもたちの楽しみの一つと考え、特に約束や当番を決めずに、「みんなで配膳してよい」と伝えてある。すると、早い者勝ちや、主張の強い子どもだけが配膳する姿が見えてきた。子どもたちから問題が出てくると考えて見守っていたが、トラブルなどの問題は起こらず、配膳ができない子どもは、諦めて受け入れていることが分かった。

子どもたちがお互いの気持ちを伝え合い、折り合いをつけていく過程の中で、必要を感じて何らかのルールやシステムを構築するような機会（集団生活による本物の体験）を奪ってしまっているのではないかと。

エピソード2 虫との関わり（モノとの対話）

隣接する公園で見つけた青虫を、二人が「飼いたい」「ちゃんと世話をする」「葉っぱを入れよう」「名前を付けよう」と準備をし、喜んで飼育を始めた。しかし、翌日には中の葉っぱがカラカラになり、休日に家で世話をすると持ち帰ったものの、翌週には死んでしまった。死んだ青虫はそのままになっていた。

図鑑に載っている飼育環境や餌にしたのに、死んでしまった青虫と向き合うことなく、無関心な子どもの姿に、保育者は疑問や違和感をもった。

エピソード3 片付け（コトとの対話）

週の最終日は、製作物などを保存することなく、“全部片付ける”ことが伝承されている。Aさんは、1週間かけて作った作品を意気揚々と作品棚に飾ろうとして、Bさんに「片付けなければいけない」と、とがめられてしまう。

子どもたちの遊びの中にはたくさんの暗黙の約束があり、園や家庭で身についた暗黙のルールが浸透していることがある。子どもたちは暗黙の約束（〇〇すべき、〇〇せねば）を敏感に感じ取り、自ら“創造的に考え、遊びを発展させていくこと”や“探求すること”にブレーキをかけてしまっている。

【観えてくる】 「ヒト・モノ・コトとの対話」に注目することで、子どもに本来ある「本能的な活動意欲」が、「そういうものだ」「こうするべきだ」「こうせねばならない」との考え方に大きく制約を受け、自由に想像し、「もっとこうしてみたらどうなるんだろう？」と行動すること（ヒト・モノ・コトとの対話）にブレーキがかかっていることに気づいた。また、保育者自身も、「保育とはこうあるべきだ」「社会とはそういうものだ」と、意識的または無意識的に行動している部分があることにも気づいた。

【対話を生む保育の工夫】 <子どもたちの「本能的な活動意欲」を阻害している要因を取り除くために>

ももニュース（※1）

子どもたちが気づいたことや面白いと思ったこと、みんなに知らせたいことを自由に掲示できる場を作る。

**チャレンジタイム**

考える機会や話し合う機会を増やすために、集会やおやつの前などのちょっとした時間に、グループに分かれて、協力して一つの目的を達成するような遊びを行う時間を設ける。

**車座ミーティング（※2）**

クラスで大切な決め事や共有したいことを、全員、またはグループ毎に車座になってその話題について意見を出し合い、理解を深めたり、決めたりしていく。



場面 1. カブトムシの羽化

保護者が、子どもたちにとカブトムシの幼虫をたくさん持参してくださった。子どもたちにカブトムシの幼虫を育てたいか尋ねると、「飼いたい！」と二つ返事で答えた。クラスでの生き物の飼育は、4月の青虫以来である。保育者は、飼い方などは特に伝えることなく、「命だから大切にしてくね」とだけ伝え、飼育箱を設置する。「大きな幼虫だね」と警戒しながら触ったり、去年のクラスに幼虫がいた経験から「優しく触らないと死んじゃうよ」と伝えたりする姿がある。「3匹もいるね！早くカブトにならないかな！」「サナギになってからカブトになるんだよ」「サナギってなに？」「茶色くて固くなるんだよ。カブトになる準備」などと、羽化を期待したり情報を伝え合ったりするやりとりをしていた。

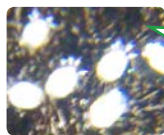
数日後、「サナギになった！固くなって動かなくなった！」と、Cさんがみんなに知らせると、虫好きの子どもたちは、1日1回は虫かごをのぞくようになった。だが、半月ほど経つと興味は薄れていく。

サナギになって約1ヶ月。Dさんが突然大声で、「カブトだ！」と言うと、全員が駆け寄り、「なんか動いていると思ったらカブトがいた」「まだオレンジの皮が付いてるね」「今出たんだよ！絶対！」など、口々に思ったことを言っていた。その後、子どもたちは、羽化の瞬間の感動を共有した。

場面 2. 汚れかな？模様かな？

触れ合えるように十分な時間を確保したことで、羽化してからは、毎日カブトムシに関わる姿があり、飼育箱の縁を歩かせたり、抱きつかせて戦わせたり、いろいろな場所に掴ませたりして遊ぶ姿があった。生き物にとって最適な飼育ではないが、カブトムシには“どんなことができるのか”“こうしたらどうなるのか”と、図鑑には載っていないような情報を自分で獲得していく様子が子どもたちにあり、その姿を保育者は見守る。すると、Eさんは、「なんかカブト白い粒が付いてるよ？ごみかな？」と、異変に気づく。

Wさん：「でも触っても取れないよ？」
Hさん：「でも爪でやったらちょっと取れてない？」
保育者：「黒い紙の上でしてみれば？」と言い、画用紙を渡す。
Wさん：「あ、ちょっと取れた！これは観察だね！」



動いた！虫だ！

顕微鏡(自由に使える)で観察する

～虫が付いたら大変だ！～

Rさん：「きっとこれがカブトの羽に穴を開けるんだ！取らなきゃ！！」

Mさん：「手で取れないから先生の歯ブラシでいいんじゃない？」

保育者：「いいよ」(ちょうど歯ブラシを持っていた)

Rさん：「すごくよく取れる。歯ブラシってすごいね」

Mさん：「あつという間にきれいになったね！カブトムシが元気になったんじゃない！？」

【ももニュースで共有】図鑑や Web 上で検索したことを、顕微鏡を活用して自分で気づく体験をしている。顕微鏡の存在が浸透し、「自分で調べる」姿が定着してきた。見つけた課題を自分たちで解決しようとする姿も増え、“ももニュース”に表して掲示している。

子どもたちが作る“ももニュース”に保護者も興味をもち、「あの虫はダニですね」との声が聞かれる。(P.4 ※ 1)

場面 3. もし、カブトムシだったら

7月下旬、羽化した3匹のカブトムシが死んでしまった。死んだカブトムシには、コバエがたかり、手足が取れ、無残であった。子どもたちは悲しさを口にするわけではないが、物憂げな表情を見せている。埋めるでもなく、数人はその現実を目を背けていた。皆一様に、命の儚さは感じているようであった。

8月当初、Mさんが幼虫を見つけ、「もしかしてメスが卵を産んでいたんじゃない！？」と思いを巡らせて数えると、25匹いた。



【車座ミーティングでのやりとり】「私のお家にうんちがいっぱいだったら嫌だから掃除しあげたい」「そんなにうんちって臭くないし、潰してみたら、普通の土みたいだったよ」「お家が狭そうだから、雄と雌で分けた方がいいと思う」「雄と雌ってどうやって見分けるの？」「背中をなでると、気持ちがいいってお尻が開くから、そこで雄と雌が見えるよ(図鑑の写真を伝えたり、やって見せたりする)」「カゴを分けるには土が足りないよ？」「砂場の砂じゃダメでしょ？」「畑みたいな土じゃないと」「図鑑に腐葉土って書いてある」「畑にも腐葉土入れたよ！行ってくる」(その後、N児が保育者に、「幼虫のお世話のお当番を決めたんだ！幼虫が元気か毎日見る当番！」と伝える)(P.4 ※ 2)

【考察】飼育物のために当番を決めたり(コト・ヒトとの対話)、疑問を浮かべたり、「もしかして、○○かな」と予想して確かめたり(モノとの対話)と、ヒト・モノ・コトとの対話を深める中で、子どもたちは自らの疑問やしたいことを探究し、発見したことや情報・体験を伝え合っている。そして、友達の興味や発見に共感し、協同的に探究する姿になった子どもたちは、主体的でかつ創造的に考えて生き物と関わり、感動を伴う体験をしている。保育者は子どもたちの活動意欲を阻害しないよう、期待の眼差しで見守るようになり、新たな気づきが生まれる環境設定を楽しむことの大切さを知った。